

Dialogue *for* People

BABAGANOIJ PROJECT 2019 中東音楽交流事業 —武器ではなく楽器をその手に— 活動報告書



CONTENTS

- P2 BABAGANOUJ の成り立ちとこれまでの活動
- P3-4 BABAGANOUJ PROJECT 2019 の活動アウトライン
- P5-7 活動報告（準備編）
- P8 コラム（1）クルドの悲劇、アンファール作戦
- P9-11 活動報告（イラク編）
- P12 コラム（2）ナブラスさんの家庭訪問
- P13-15 活動報告（ヨルダン編）
- P16 活動報告会
- P17 会計報告
- P18 終わりに一武器ではなく楽器をその手に一

（表紙）イラク北部クルド自治区、シリアからの難民の人々が暮らすダラシャ克蘭難民キャンプにて演奏する。人々は熱狂的にステージに詰めかけた。（©KEIKO TANABE）

（目次）ダラシャ克蘭難民キャンプの準備を覗きにきた女の子。「いったい何がはじまるの？」と、興味津々。（©Kei Sato）





パレスチナ西岸地区、ベツレヘムのアイダ難民キャンプのビルの屋上にて子どもたちと一緒に音楽を楽しむ。
(©KOTARO MANABE)

BABAGANOUJ の成り立ちとこれまでの歩み

『BABAGANOUJ (ババガヌージュ)』は、2016年、ミュージシャンのSUGIZOさんが、「難民と呼ばれる人々と、ひとりの人間として向き合い、話してみたい」と、ヨルダンを訪問した際に結成されたバンドです。もともとは、難民キャンプで演奏をするつもりなどなかったSUGIZOさんですが、是非キャンプで人々に音楽を届けてほしいと言われ、急遽現地でヴァイオリンを調達しました。その際、現在イラクで医療支援を続けるJIM-NETで働く斉藤亮平さんがキーボードを、アフリカ、中東などで取材を続けるDialogue for Peopleのフォトジャーナリスト、佐藤慧がギターを務め、シリアから逃れてきた人々の前でライブを行うこととなりました。

故郷を追われ、未来への展望も描きづらい人々にとって、音楽など無力ではないのか。そんな不安を抱えながらの初ライブでしたが、人々はその音楽に体を揺らし、手を叩き、溢れるエネルギーを会場全体で共有するような、素晴らしい時間となりました。続くもう一カ所の難民キャンプでのライブでは、普段人前であまり騒ぐことをしない、伝統衣装に身を包んだ女性たちが、子どもたちと一緒に盛り上がりました。様々なストレスのかかる難民キャンプの生活では、中々エネルギーを発散する場や機会も少なく、学校の授業でも、音楽や芸術といった情操教育の時間は限られています。そんな中、『ババガヌージュ』のライブを楽しむ人々を見て、音楽の大切さ、必要性というものを再確認したのです。

難民となった人々の中には、戦争による過度なストレスやトラウマから、復讐のために武器を取り、戦場となった故郷に戻る人々もいます。もしそうした人々が、武器ではなく楽器を手にとることができれば、音楽というものが、少しでも人々の心を解き放つことに貢献できれば。そんな思いで、『ババガヌージュ』は2018年にパレスチナ、そして2019年10月に、イラクとヨルダンにてライブを行ってきました。

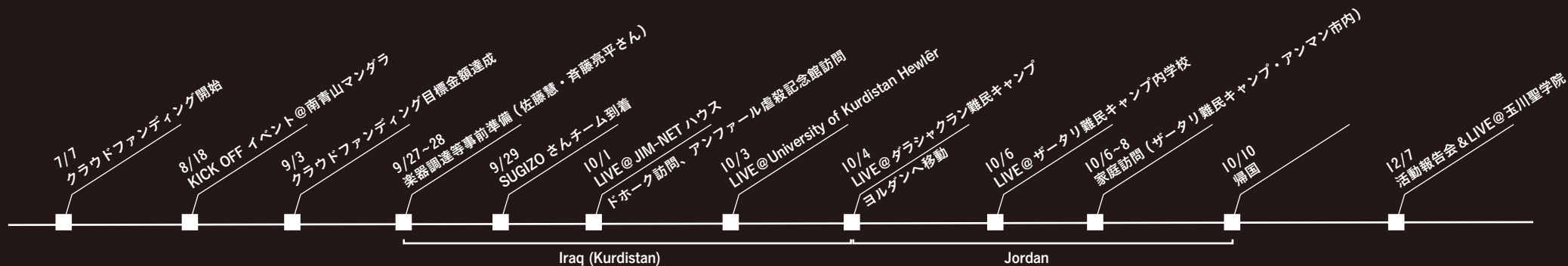
この度のプロジェクトでは、本活動を応援して下さる多くの方にご寄付を頂き、みなさまの想いと共に演奏して頂くことができました。改めまして、ひとりひとりのご支援に感謝申し上げます。本報告書では、そんな活動を振り返り、そこにいる人々が、私たちと変わらない、音楽の大好きな普通の人々だということを、みなさまと共に分かち合えたら幸いです。

これまでのババガヌージュの活動先

2016年	ヨルダン	アズラック難民キャンプ ザータリ難民キャンプ
2018年	パレスチナ	ラマッラー市庁舎ホール アイダ難民キャンプ ナブルス (ムニープ・マスリ氏邸)

BABAGANOIJ PROJECT 2019 の活動アウトライン

(© KEIKO TANABE)



Dialogue for Peopleのウェブサイトにてクラウドファンディングを開始。9/3、目標金額の340万円を達成。のべ336人の方から心あたたまご支援をいただきました。



今回のプロジェクト発足に際しキックオフイベントを実施。2016年からの活動を振り返り、意気込みなどを語り、演奏を披露しました。詳細レポートは[こちら](#)。(© KEIKO TANABE)



9/27~10/10の日程で、イラク(クルド人自治区など)およびヨルダンの難民キャンプなどで、ライブをはじめとする音楽交流、各地で家庭訪問などを行いました。(© KEIKO TANABE)
※活動の詳細は次ページ以降のレポートをご覧ください。



今回のプロジェクトの報告会を実施。活動の様子と現地でのエピソードや想い、プロジェクト全体を通じて感じたことなどをお話させていただきました。詳細レポートは[こちら](#)。(© KEIKO TANABE)

BABAGANOUJ PROJECT 2019 の活動アウトライン

渡航先情報

現在不安定な状況の続く中東地域では、多くの方が難民、国内避難民として故郷を追われています。イラク北部クルド自治区には、シリアでの紛争より家を追われた人々の暮らす難民キャンプが多くあります。そんな人々と共に音楽を紡ぐことを目的にババガヌージュはクルド自治区へと飛びました。また、ババガヌージュ結成の地となったヨルダンへは、前回出会った人々との再会を目的に再訪を決めました。

(1) クルディスタン

イラク北部クルディスタンは、主にクルド人と呼ばれる人々の暮らす自治区です。クルド人とは、トルコ、イラク、イラン、シリア、アルメニアなどの国境に跨(またが)り暮らす人々で、オスマン帝国解体後、現在のように、それぞれの国の中で少数民族として暮らすことを強いられてきました。その人口は約3千万とも言われ、「国を持たない最大の民族」と称されることもあります。

イラク北部クルディスタンが自治を獲得するまでも、数々の困難がありました。イラン・イラク戦争末期の1988年、独裁政権を敷いたサダム・フセイン元イラク大統領の命により、わずか6ヵ月半の間に殺された人の数は約18万人に上ると言われています。近年も、中東地域の混乱に乗じて勃興した武装組織IS(いわゆる過激派勢力「イスラム国」)との激しい衝突があり、戦争の傷跡は未だ数多く残っています。しかし、その首都のアルビル(Erbil)は、近年「第二のドバイ」と呼ばれるほどの経済成長を遂げてきました。平和を象徴する緑の光を放つモスク周辺では、夜になっても子どもたちが遊んでいる様子を見ることができます。数千年に及ぶ豊かな文化、雄大な

大地、洗練されたモダンな街並みは、多くの日本人のイメージする「イラク」とは違ったものでしょう。

ISとの戦闘や、近隣諸国の紛争により、現在クルディスタン内で避難生活を強いられているIDP(国内避難民)や難民の数は、150万人を超えると報告されています。ババガヌージュは今回、そんなクルディスタンの医療施設、大学、難民キャンプでライブを行ってきました。



(© Kei Sato)

(2) ヨルダン

石油などに恵まれている周辺の中東諸国と違い、ヨルダンは天然資源に乏しく、経済基盤も脆弱な国と言われています。国民の70%が、元々パレスチナからの難民であり、かつ現在、シリアの戦火に巻き込まれた人々の多くがこの国へと逃れてきています。ザータリ難民キャンプ(約8万人)、アズラック難民キャンプ(約4万人)と、大規模キャンプがありますが、ヨルダンに逃れてきた人々の8割以上が、難民キャンプではなく、都市部やその郊外で避難生活を送っています。両難民キャンプが、砂漠の真ん中に作られたものであるという過酷な立地と、生活の糧を得るためには都市部の方が都合が良いということなどがその理由としてあげられます。しかし、母国を離れて暮らす人々の得られる仕事は低賃金、重労働のものが多く、戦争による怪我によって、働けない人々も多くいます。そうした生活の中で孤立する人々の中には、子どもが働きに出ざるをえない家庭や、病気になっても医療を受けられない人々もあり、教育の欠如や、貧困の連鎖も懸念されています。ババガヌージュは、2016年にも訪れたザータリ難民キャンプ

での演奏や、当時訪問させて頂いたご家庭の再訪などを行ってきました。ニュースにならない個々の困難を、自己責任だと切り捨てるのではなく、それぞれが何かを持ち寄れたらと願っています。



(© Kei Sato)

活動報告（Ⅰ）準備編

イラク・クルド人自治区、アルビルへ

真夏を過ぎたとはいえ、日中のアルビルは40度近い乾いた空気に包まれていました。イラク北部クルディスタン。国としてはイラクの一部ですが、実質上クルド人を主体とした自治区として、独自の文化、社会を築いています。

クルド人と呼ばれる人々は、“国を持たない最大の民族”と呼ばれることもあり、トルコ、シリア、イラク、イランなどの国境にまたがり暮らしています。どの国でも“マイノリティ”として扱われ、抑圧や差別に晒されてきた悲しい歴史を持っています。イラク国内でも、中央政府からの抑圧のみならず、ときに多くの市民が殺される虐殺を経験してきました。2013年以降、ISの台頭によって、クルディスタン自治政府は、アメリカ軍を後ろ盾に、イラク軍と共に数年に渡り交戦を続けてきましたが、2017年に北部の都市、モスルを奪還して以来、治安は急速に回復してきています。

自治区の首都のアルビルには高層マンションが数多くそびえたち、街の中心に位置する「アルビル城」前の噴水広場では、夜の涼しい風の中、多くの親子連れが散歩している様子を見ることができます。

「イラク」と聞くと、「戦争してばかりの危ない国」、「瓦礫だらけの国」といったイメージを抱く人もいるかもしれませんが、風光明媚なアルビルの光景を見ると、それが偏った情報による先入観に過ぎなかったことに気づくことでしょう。

現地の人々と一緒にライブ準備！

いつもはフォトジャーナリストとして、戦争により故郷を追われた人々などの取材をしている僕（佐藤 慧）ですが、今回はババガヌージュの一員として、SUGIZOさんや他の面々が到着する前に現地入りし、必要な楽器や資材の手配に奔走していました。メンバーであり、イラクで医療支援を続けるNGO・JIM-NETの斉藤亮平さんと、ライブ会場となる場所の確認や、宿や車の手配、準備などを行います。

日本では簡単に準備できるものでも、こちらで準備するとなると難しいものも多くあります。もちろん、現地入りする前から現地パートナーであるバルザン君と頻りに連絡を取り準備を進めていましたが、実際に現地で確認しなければいけない



アルビル城前は市民の憩いの場。日中の陽射しが厳しい分、夕方以降になると多くの人で賑わいます。
(© KEIKO TANABE)

ものも多く、予想以上に東奔西走することになりました。楽器を全て日本から持ってくるとなると、荷物の運搬費だけで相当な額になってしまうため、メインの楽器以外は、なるべく現地調達を試みました。

ギター、ヴァイオリンのスペアはなんとか見つかりましたが、「ジャンベ」（素手で叩くスタイルの西アフリカ起源の打楽器）探しは難航しました。似たようなものがないわけではないのですが、似て非なる中東スタイルの打楽器で、皮の張りも、本体の素材も違い、当然音も違います。アルビル中の楽器屋を巡りましたが、なかなか適したものが見つかりません。最後の望みをかけて入った楽器屋で、なんとか代わりになりそうな太鼓が見つかりました。

今回一緒に演奏を行う COSMIC DANCE QUARTET のメンバーのけんじさんは、あらゆる打楽器を震わせるパーカッションの達人ですが、ひとつ特徴的な楽器を使います。「ドラム缶」です。（ドラムではありません。）オイルなどを入れる容器のドラム缶の片面をくりぬき、もう片方の面に鎖を固定し叩くのです。その迫力ある特徴的な音は、SUGIZO さんの楽曲に欠かせないもの。バルザン君と、車の修理屋が軒を連ねる一角に赴き、イランから運ばれてきた水色のドラム缶を見つけました。ちょっとポップな色ですが、黒いスプレーで色を塗れば格好もつくでしょう。さっそくバルザン君の友人と一緒に底をくりぬき、怪我をしないように尖った断面を叩いて潰し、よく洗います。

他にも、マニピュレーター MaZDA さんが機材を置く机や、SUGIZO さんのエフェクター台、ドラム缶の土台なども手作りで揃えていきます。スネアドラムを立ちながら叩くために必要なスタンドも手配できなかったため、代わりに小型の箱のような台も作ることにしました。日本ほど既製品が溢れていないからでしょうか、板を加工する木工屋もすぐに見つかり、カット、組み立ても順調に進みました。



「ドラム缶」を「ドラム」に加工！（© Kei Sato）



板の加工は木工屋さんへ。手際よく板を切断、組み立ててくれる。（© Kei Sato）



けんじさんと楽器屋の方での即興セッションがはじまる。（© Kei Sato）

SUGIZO さんらも到着

その最中にも、ライブ会場となる大学や難民キャンプ、ドライバーやレンタカー会社などの手配のためバルザン君が各所連絡を取ってくれています。シンバルや予備の楽器は 200 km 離れた別の街から取り寄せ、これで準備万端というタイミングで SUGIZO さんたちがアルビルに到着。日本からドーハを乗り継ぎやってきた面々と現地で合流です。

ついにプロジェクトが本格的に始動したという実感が気分が高揚すると同時に、「準備は本当に問題ないだろうか」という不安もありました。早速みなで楽器をチェックし、けんじさんにも「中東風打楽器」を叩いてもらいます。バルザン君も不安そうに見つめていましたが、「これで大丈夫！」の一言に安心した様子でした。

「ずっとクルドの地に憧れていた」というSUGIZOさんは、中東に関してずっと深い関心を寄せてきたといいます。

「近年では、中東というと戦争やテロなど、負のイメージが強いけれど、僕の中では深い文化の中心地としてずっと憧れがあった。念願のクルドの人々にも会えてとても嬉しい」。
(SUGIZOさん)

そう、ババガヌージュ・プロジェクトは、単に現地に音楽を届けるだけではなく、そこにいる人々、文化に触れ、交流し、端的な情報からは零れ落ちてしまうその土地の「素顔」を日本に持ち帰ることも大きな目的のひとつなのです。

「交流」とは、一方的なものではありません。その土地の香りを嗅ぎ、人々の声に耳を傾けて、一緒に何かをつくり上げていく。その何かがたまたま僕らの場合は「音楽」であって、その活動を通じて生まれたものが、日本のみなさんと現地の人々との架け橋となるようならば、それほど嬉しいことはありません。



中東の伝統楽器「サズ」のいわゆる西洋の平均律とは違った音階に興味津々。楽器屋の店主とのセッションが自然にはじまります。同じ音楽を愛する者同士、月夜に調べを奏で続けました。(© Kei Sato)



中東らしい細い月を背に、憧れのクルドの地に立つSUGIZOさん。
(© KEIKO TANABE)



ここでライブ以外の時間で触れた人々や文化、歴史の話も紹介したいと思います。短い滞在の中でいくつものライブを計画しているため、ほとんどの時間はその準備に費やされてしまうのですが、やはりせっかく現地に来ている以上、その地の人々と語り、歴史や文化を学び、感情を分かち合うという経験も欠かすことはできません。

何度もこの地を訪れている僕ですら、まだまだ知らないことだらけで、いつもたくさんの魅力的な人々、文化に出会わせて頂いています。今回、準備の合間を縫ってSUGIZOさんは北部のドホークという街へ、JIM-NETが支援を続けていたご家庭を訪問し(Column 2を参照)、残るメンバーと僕は、チャンチャマルという街にある、とある博物館を訪れました。

その博物館の名は「アンファール虐殺記念館」。イラン・イラク戦争末期の1988年、サダム・フセイン率いるバース党政権は、イラク北部に住むクルド人たちを反乱分子と見做し、「アンファール作戦」という虐殺を行いました。わずか6ヵ月半の間に殺された人の数は約18万人に上ると言われています。クルドの人々の住む街々を襲い、あらゆるものを破壊。人々を砂漠へ連行し、家族を引き離したうえで巨大な穴に放り込み、機銃掃射で命を奪うという、近代でも稀にみる非人道的な

殺戮でした。作戦中、少なくとも255の化学兵器が投下され、ハラブジャという村では、1日にして5,000の命が尽きたといわれています。化学兵器攻撃を受けたクルドの人々の中には、いまだ見つかっていない遺体も多いそうです。

「ヒロシマ・ナガサキを知る日本人なら、この痛みがわかるでしょう」とは、自らの親族も虐殺された祈念館館長の言葉でした。

「我々はヒロシマ・ナガサキのことをよく知っています。クルド語に翻訳された本もある。けれどアンファールの虐殺について、どれだけの日本人が知っているのでしょうか。是非ここで得たものを日本に持ち帰ってほしいです」。

訪れたみなも、初めて知る史実に息を呑みました。

凄惨な過去と向き合うことは苦しいことですが、きちんと知ること、同じ過ちを繰り返さないように学べるのではないのでしょうか。改めて、この地を訪れ、ご縁を頂いた意味を想いました。「武器ではなく楽器をその手に」を掲げるババガヌージュでも、改めて一音一音、平和への想いを込めて演奏したいと強く思いました。

(Photo&Text Kei Sato)

活動報告（２）イラク編



初めて見る楽器に嬉しそうに寄ってくる女の子。この後みんなで思い思いに楽器を奏でた。（© KEIKO TANABE）

「JIM-NET ハウス」でのライブ

10月2日、ついにババガヌージュ現地初演奏の日となりました。最初の演奏場所となる「JIM-NET ハウス」は、イラクで医療支援を続ける NGO、「JIM-NET（日本イラク医療支援ネットワーク）」の運営する施設で、市内の病院の敷地内に、今年5月建てられました。

こちらでは看護師不足という問題もあり、特に子どもが入院する場合、その家族が付きっきりで面倒を見ることも珍しくありません。ただ、その際に問題となってくるのがその家族の宿泊場所です。原則、病院に宿泊まりできるのは女性だけであり、母親は子どもと添い寝することができても、父親や、他の家族は別途宿泊場所を探さなければなりません。「JIM-NET ハウス」では、がんを患い、長期入院が必要な子どもたちが、家族と一緒に泊まれる場所を提供しています。単に生活できる場所だけではなく、勉強部屋や、室内でも運動のできる遊び場、大型のキッチンや食堂も備え、治療期間中の本人や家族の負担を少しでも減らせるようにと配慮されています。今回ババガヌージュは、そんな子どもたちとご家族の前で演奏させて頂けることとなりました。

クルドの人々は、中東の他の諸国の人々に比べるとどこか奥ゆかしいところがあると思います。日本人に似ていると言えるかもしれません。はじめは緊張しながら様子を伺っているものの、一度距離を詰めると家族のように接してくれます。このライブでも、初めは見知らぬアジア人たちに身を固くしていた人々が、クルド民謡が鳴り始めると同時に手を叩き始め、体を揺らしはじめました。

立ち上がり、写真を撮りながら一緒に合唱に加わり始め、気が付いたら部屋中に温かい空気が満ちています。

演奏が終わると、子どもたちが駆け寄ってきて、それぞれの楽器に手を伸ばします。SUGIZOさんのヴァイオリンを嬉しそうに構える子や、けんじさんのパーカッションを得意げに叩く子。亮平さんのピアノで、見様見真似で上手に曲をひいている子もいます。

ここにいる子は、ほとんどが小児がんの治療を受けている子です。抗がん剤の治療で髪の毛が抜けてしまった子もいます。子どもががんを患っているとわかり、父親が家を出て行ってしまった家庭もあれば、経済的に困窮しており、こうして支援を受けることすらおこがましいと、自分を責める親御さんもいました。



JIM-NET が今年オープンさせた小児がんの子どもと家族のための総合支援施設「JIM-NET ハウス」でのライブ風景。（©KEIKO TANABE）

そんな場所での演奏が、本当に楽しんでもらえるものなのか、不安がなかったわけではありません。音楽は心の滋養になる。でも、本当に苦しい時には、音楽は無力なものではないか。かえって、人々の心を傷つけてしまうのではないか。もちろん、事前に JIM-NET の方々にお話を聞き、僕らの音楽を楽しみに待っていることは知っていましたが、音を鳴らすまでは緊張していました。

しかし、ライブが終わってみると、子どもたちが笑顔で楽器を奏で、それを家族が嬉しそうに写真を撮っています。彼ら、彼女らの楽しい思い出をひとつでも増やすことができたのなら、やっぱり音楽を演奏して良かったなと思えた瞬間でした。子どもたちの毎日が、温かなものになりますように。そう願いながら JIM-NET ハウスを後にしました。



はじめて触るヴァイオリンに緊張しながらも満面の笑みを浮かべる子どもたち。(©KEIKO TANABE)



ダンスミュージックに、ノリノリで踊り出す人も。(©KEIKO TANABE)



「開演 30 秒前まで設営していた」とは思えないほど、会場は大盛り上がり。(©KEIKO TANABE)

手作りの大学ライブ

翌 3 日はアルビル市内の大学、University of Kurdistan Hewlêr (UKH) でのライブを行いました。クルディスタンの未来を担う優秀な人材を輩出し続けているこの大学は、このプロジェクトの現地コーディネーター、バルザン君の出身校でもあります。全授業を英語で行い、教授に敬称 (Dr. など) をつけることを許さない (立場による権威をつくらない) という自由な校風のこの大学には、海外の文化や音楽にも関心の高い学生が多いということで、今回のライブ開催にも協力頂く事になりました。難民キャンプでの演奏をメインとしているババガヌージュですが、活動の目的はそれだけではありません。とかく近年、戦争や武装勢力といったネガティブなイメージのつきまとう「中東」という言葉ですが、そこに暮らす人々は僕らと変わらない、音楽を愛する普通の人々なのです。その素顔を日本に伝えることも、このプロジェクトの大事な役割です。とはいえ、ライブハウスもないクルディスタンでは、音響や照明のプロを探すのも一苦労。限られた機材、環境の中、時に停電に見舞われながらもステージ作りを進めていきます。

そして遂に開場。SUGIZO さんのソロプロジェクトの COSMIC DANCE QUALTET が奏でる激しいビートが響き渡ると、約 200 名の聴衆は初めて耳にする音楽に湧き上がりました。ババガヌージュの演奏するクルドの伝統音楽には、手を叩き喜ぶ人々が、次第に合唱を加えていきます。共演した地元デスメタルバンド、DARK PHANTOM の演奏にもコアなファンが熱狂します。

一方的に音楽を演奏するのではなく、一緒にその空間を生み出していく。この一体感に、国境も人種も関係ありません。「もっとこういうライブの機会を作ってほしい!」、「または非クルディスタンに帰ってきてくれ!」という声援とともに、無事大学ライブも終演を迎えました。

すべて手作りのライブには、地元学生のボランティアにも協力して頂き、文字通りみんなで作ったライブとなりました。

ダラシャ克蘭難民キャンプ

クルディスタン最終日はダラシャ克蘭難民キャンプにて、シリアの戦乱から逃れて来た人々や、国内避難民の方々に向けてのライブを行いました。そもそものババガヌージュ結成のきっかけが、難民キャンプという非日常の場で生活する人々にとって、衣食住の次に必要となる、心の滋養、精神を解放する時間としての「音楽の鳴る場所」を共に創りたいという思いでした。

シリアが戦乱に巻き込まれ早8年以上。2013年に開設され、約1万2千人の暮らすダラシャ克蘭難民キャンプでは、そもそもの住人の半数以上が18歳以下の若者です。エネルギーを持て余す子どもたちが、ライブの準備中から続々と集まってきます。地元の伝統歌謡とダンスチームの公演から始まったライブでは、続くCOSMIC DANCE QUARTETの音楽に人々のボルテージも一気に高まり、ステージと聴衆が限りなく密接するライブとなりました。

即興でダンスを披露する男性、ステージ上で演奏中のSUGIZOさんとセルフィーを撮る人々。塀の上で飛び跳ねる子どもたち。両腕を振りかざし全身を躍動させるお母さん。ババガヌージュの演奏する『マウテニー（我が祖国）』という中東音楽では合唱が起こり、SUGIZOさん作曲の『The Voyage Home』では、「すべての人々が自分の故郷に帰れるように」という想いに歓声が上がりました。

自ら望んで「難民」となった人などひとりもいません。自分の



最前列のお客さんの一部が舞台にあがってしまうという珍事件も。
(©KEIKO TANABE)

一部ともいえる「故郷」を追われ、不自由な暮らしを強いられるということはどれほど大変なことなのでしょう。住む場所や文化、言葉が違えど、誰もが尊厳を持ったひとりひとりの存在なのです。人々を追いやる「境界線」というものが人間によって造り出されたものであるなら、それはまたきっと人間自身の手によって克服していけるはず。ステージの目の前で（ステージ上でも！）一緒に音楽を楽しむ人々を見てみると、そんな未来を信じて少しずつでもできることをしていこうという勇気を頂きます。

何かを「与える」という上から目線の姿勢ではなく、未来を「共に育てていく」。ババガヌージュの活動が、そんな場所を広げていくことができればと願いながら、最後の一音まで大切に響かせていく。そして活動の場はヨルダンへ。ババガヌージュ結成の地へと空路を行います。



ライブが終わってもいつまでも帰らず話しかけてくる人々。
(©KEIKO TANABE)



10月2日、ババガヌージュのメンバーであるSUGIZOさんとローカルスタッフのリームと共にドホーク郊外のある家族の家を訪問してきました。その家族の家に到着するとまず目に入ってくるのは壁にかけられた1枚の少女の写真でした。彼女は2016年1月にこの世を去ったナブラス（享年14歳）。

「ナブラスが生きていたら19歳になるくらいかしらね…。あの子が亡くなって以来、思い出さない日はないわ」。

ナブラスの写真を遠くに見つめながら母はか細い声で吐き出すように呟きました。ヤズディ教徒のナブラス一家が住んでいたシンジャールがISによって襲撃されたのは2014年のこと。骨のがんに苦しんでいたナブラスとその一家は命の危機を感じ、決死の覚悟でシンジャールを後にし、ドホーク郊外へと避難しました。隙間風が強く入り込むコンクリートの家でナブラスは息を引き取りました。

それから3年半の月日が流れ、我々が訪問したナブラスの家には新しい“ナブラス”が誕生していました。亡くなったナブラスの兄が結婚し、生まれてきた女の子にナブラスと名付けたのです。

「妹を忘れないために同じ名前を付けたんだ」。

幼い“ナブラス”はどこか亡きナブラスの面影を感じさせました。ヤズディ教徒としての生き難さ、戻ることが出来ない故郷への想い、そして忘れ得ぬナブラスの死と共に生きる家族にとって彼女の存在は希望だと言います。

闘病中のナブラスが描いたポインセチアの絵は、2016年のJIM-NETチョコ募金のチョコ缶のデザインに採用され、今年（2019年）は同じチョコ缶が復刻版として販売されています。

がんの子どもたちを応援してくれているSUGIZOさんと共に音楽交流や難民キャンプでのライブ同様に、その地で起きていることの一端を少しずつ皆様にもお伝えしていければと心新たにナブラス一家の家を後にしました。

(Photo © KEIKO TANABE, Text Ryohei Saito/JIM-NET)

活動報告（3）ヨルダン編

はじまりの場所へ

活動もいよいよ後半。早朝にクルディスタンからヨルダンに飛び、まずは過密スケジュールの疲れを癒すためにゆっくりと休みました。翌日、認定NPO法人国境なき子どもたち(KnK)の現地駐在スタッフ、松永晴子さんと一緒に、ザータリ難民キャンプを目指します。2016年に演奏してから既に3年以上が経過しています。いったい今のキャンプの様子はどのようなものなのでしょう。

砂漠を走り、茶色い荒野の向こうに見覚えのあるプレハブ群が見えてきました。今でも8万人以上の人々が暮らすこのキャンプは、いわばひとつの街のようです。入口でも厳重に警察によるチェックを受け、いよいよ活動地となる学校へと向かいました。

まずは5年生の教室を覗いてみると、ちょうど音楽の授業の真っ最中。僕らもちゃっかり混ぜてもらい、後ろの席で観察していました。

女の子のクラスなのですが（こちらでは文化的に男女別々のクラスとなっています）、ひとりひとり、みな澆刺と歌います。後から伺ったのですが、やはりキャンプの中では音楽や体育など、情操教育は後回しにされがちで、男の子には音楽のクラスそのものがないそうです。教科書もなく、電池式のキーボードひとつで行われる音楽の授業ですが、きっと彼女たちにとっては生活に潤いを与える大切な時間なのでしょう。

授業の最後に、ババガヌージュで演奏させて頂きました。『マウテニー』はさすがに中東最大の有名曲、みんな一緒に口ずさんでくれました。ヴァイオリンを見るのがはじめてという子がほとんどで、その音色にみな目をまん丸にして驚いていました。

次に訪れたクラスは10年生（日本でいう高校1年生）の女の子たち。こちらでは、「ストーリーライティング」という面白い授業をやっていました。生徒それぞれに紙を配り、ひとりひとり、順番に物語をつくっていくのです。ある子が数行書いて、その続きを他の子が書く、というこの面白い授業は、それぞれの想像力、構成力をみなで共有することで、社会性を身



演奏が終わるとみな我先にと楽器の元へ。
はじめて触るヴァイオリン。(© KEIKO TANABE)

に着ける目的もあるのだとか。

しかし、そんな授業の最中に、謎の日本人たちが（しかも楽器を持って）やってきたものだから、みな気になって仕方ありません。授業の最後に演奏をさせてもらおうと、こちらもみな恥じる様子もなく大きな声で歌ってくれました。こうした小さな教室で、触れられるくらいの距離で一緒に音楽を奏でること。これこそがババガヌージュの醍醐味と改めて思いました。

授業が終わると、女の子たちは帰宅の準備をはじめます。午前中は女子クラスで、午後が男子クラスなのです。でも、楽器に触れたくてしょうがない女の子たちが、僕らの周りを取り囲み、一向に帰宅する気配がありません。好奇心旺盛な女の子たちは、よく観るとファッションもとても斬新で素敵なものばかり。日本の学校では、服装やおしゃれなど、色々とやかく言われることが多いことを考えると、こちらの方がのびやかに感性を育んでいるのかもしれないなあと感じます。

もちろん、どちらも一長一短かもしれませんが、こういったお互いの「違い」を共に学び合える「魅力」として感じていけば、きっちもって、世界の人々と触れ合うことが楽しくなるのではないかなと思います。

午後のクラスはエネルギー溢れる男の子たち。まずは授業を見させてもらいに8年生（中学2年生）のクラスへ。「いつもはもっと騒がしい」という松永さんですが、みな僕らがいるからか、背筋を伸ばして黒板に向かっていきます。授業の途中で給食が配られました。学校に行けばごはんが食べられる、というのは、通学のための大切なモチベーションになっているそうです。

その後3、5年生の合同クラスと、6、7年生の合同クラスで演奏をさせて頂きました。女の子たちとはまた違った爆発的なエネルギーに楽器の音がかきけされるほどでしたが、途中で生徒のひとりがパーカッションを叩いてくれたりと、こちらも大盛況のうちに終えることができました。



みんな合唱で音楽に加わってくれた。(©KEIKO TANABE)



おしゃれ大好き！様々な着こなしを楽しむ女の子たち。(©KEIKO TANABE)

また戻ってくる機会も楽しみですが、みんなが故郷に帰れることをそれ以上に願って、記念撮影。(© KEIKO TANABE)





キャンプ内の先生のお宅にもお邪魔させて頂いた。シリアの料理は本当にきめ細やかでおいしい！（©KEIKO TANABE）

懐かしい方との再会

そして、ヨルダンの訪問でとても楽しみにしていたのが、前回（2016年）にお会いした人々との再会です。不安定な生活の中で引っ越しを繰り返す人も多く、全ての方と再会できたわけではありませんが、ヤヒアさん一家、アブハーレドさん一家を再訪することができました。

戦争により足を負傷したヤヒアさん一家は、前回の訪問時は陽光も射さない、薄暗くじめじめとした小さな家で暮らしており、みな体調を崩しがちで心配していました。数回の引っ越しの後に落ち着いたという今の家の玄関には、収穫を目前に控えたオリーブの樹が生い茂っています。まだまだ経済的には厳しいとのことですが、みなさんの健やかな笑顔に僕たちも安心しました。

アブハーレドさんのお宅では、前回訪問時には1歳だった男の子、ハミード君とも無事再会。4歳のやんちゃ坊主になっていました。糖尿病を患っていたアブハーレドさんも、今はすこぶる体調がいいとのことですが、外国でいちから生活基盤を作り上げるのは大変なことです。

いつかは故郷に、という想いはあっても、シリアを取り巻く状況は好転するどころか、より不透明さを増していくばかり。一時的な生活とはいえ、子どもたちを学校に通わせる必要もあり、周囲の住人から厳しい視線を向けられることも少なくありません。ひとりの力では解決の難しい大きな問題も山積みですが、まずは「難民」と呼ばれる人々も、普通の日常を求めている僕らと変わらない人々なのだと知ることで、少しずつその距離が縮まっていくのではないのでしょうか？

またの再会と、彼らの故郷の平和を願いつつ、砂糖のたっぷり入った甘いチャーイ（紅茶）を頂きました。

ライブと家庭訪問を無事終えたババガヌージュ一行は、またすぐ中東に戻ってくる予感を胸に、ヨルダンを後にしました。

終了後、先生方にお話を伺うと、生徒たちは本当に心から楽しんでくれたとのことでした。難民キャンプで音楽を演奏するというのが、どういった価値を持つものなのか、ある先生はこう答えてくれました。「どの子にもそれぞれ、唯一無二の才能や興味、関心があります。多様なモノゴトに触れることは、その子の将来の可能性を広げることになるのです。私たちだけでは提供できない可能性を、こうして届けてくださりありがとうございます」。僕たち自身、元気な子どもたちや、日々真摯に子どもたちと向き合う先生方に沢山の学びを頂きました。お互いが、お互いにできることを持ち寄り、交流することで、きっと世界はもっともっと温かく成長していけるのではないかと思います。



ヤヒアさん宅にて、大きくなった子供たちと。明るい雰囲気です。安心しました。（©KEIKO TANABE）



そのまま大きくなった感じのハミード君。（左 ©Kei Sato / 右 ©KEIKO TANABE）

BABAGANOUJ PROJECT 2019 活動報告会



帰国後の12月7日、玉川聖学院キンレイホールにて報告会を実施いたしました。当日は約250名のご参加をいただき、ババガヌージュの発足、そして今回の活動を振り返るトークと、現地でも演奏された楽曲のライブをお届けしました。

詳細なレポートは[こちら](#)からご覧いただけますが、この場でババガヌージュメンバーからのメッセージをお届けしたいと思います。

斉藤 亮平 (Key)

JIM-NET 海外事業担当

長らく中東地域で支援活動に従事してきましたが、中東の女性が立ち上がって歓声をあげている光景を見たのは、ババガヌージュのライブが初めてです。人は本当に感動したとき、性別や宗教は全く関係なくなるのだなあと驚きました。今回皆さんの応援があって、皆さんと一緒に来ているということを実感できました。今後も活動が続けたいです。

佐藤 慧 (Gt.)

フォトジャーナリスト / ライター

少しでも興味を持っていた方は、ぜひもっといろんな形で中東の文化や歴史に触れていただけたらと思います。ちょっと掘り下げて自分で勉強してみると、報告会の写真の中に出てきた人たちが『こういうところに住んでいるんだな』と、ぐっと身近になるかもしれません。こうして少しずつでも心の距離を縮めていけるような活動を続けていきたいと思います。

SUGIZO (Vio)

作曲家 / ギタリスト / ヴァイオリニスト
音楽プロデューサー

今回の活動は、過去2回の訪問と異なり、皆さんの支援があって成り立ったものでした。僕らは皆さんを代表して現地に向かった。それは意外にとっても気持ちがよく、そして今まで以上に責任を感じるものでした。これからも活動を続け、危険を逃れて懸命に生きている難民の方々に、光を届けていきたいと思います。今回は本当にありがとうございました。

BABAGANOUJ PROJECT 2019 会計報告

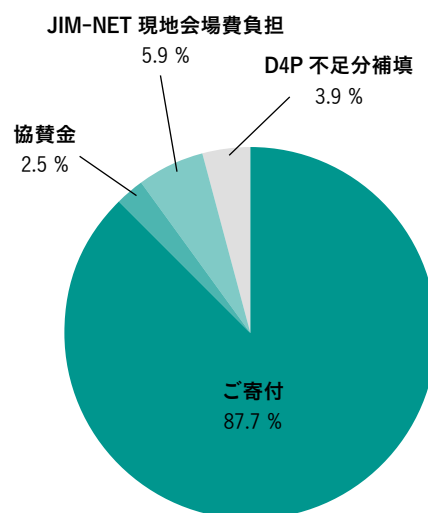
収入については、クラウドファンディング等を通じてのべ 336 人の方から 3,449,712 円のご寄付が集まりました。また I 社から協賛金をいただいたほか、JIM-NET による現地会場費負担、さらに報告会の会場については玉川聖学院から無償でご提供いただくことができ、合計 3,780,166 円となりました。

支出に関しては、主に現地でのライブ実施とその調整のため想定以上に費用がかかりましたが、報告会会場費などその他の部分では費用を抑えることができました。

結果としては 15 万円ほど支出が多くなりましたが、この部分は Dialogue for People の事業費から補填いたしました。

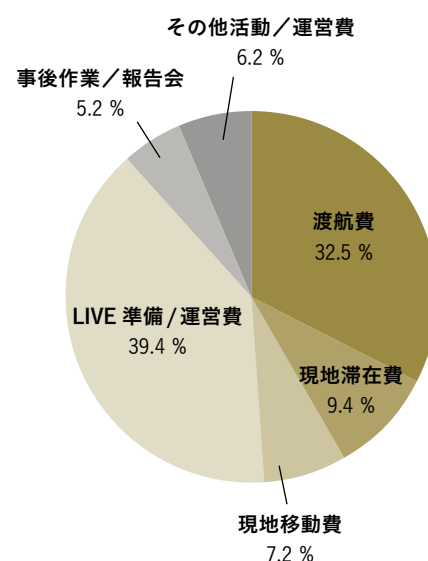
■ 収入の部

項目	金額 (単位: 円)	
ご寄付	3,449,712	※クラウドファンディング、イベント時募金ほか
協賛金	100,000	
JIM-NET 現地会場費負担	230,454	※ 2,100 ドル相当
Dialogue for People 不足分補填	152,899	※支出超過分を補填
合計	3,933,065	



■ 支出の部

項目	金額 (単位: 円)	
渡航費	1,277,570	
現地滞在費	371,507	
現地移動費	284,227	※車両借上費、ドライバー謝礼、ガソリン代など
LIVE 準備/運営費	1,550,921	※現地コーディネート費、現地アーティスト出演謝礼、リハーサル費、音響・照明等技术費など
事後作業/報告会	204,025	※リターン品発送料、報告会運営費など
その他活動/運営費	244,815	※事務局運営費、キックオフイベント運営費、支払い手数料など
合計	3,933,065	



皆さんのあたたかなご支援により、プロジェクトを完了することができました。
ご協力、応援、本当にありがとうございました。

終わりに — 武器ではなく楽器をその手に

今回の滞在で訪れたイラク北部、クルディスタンに暮らすクルドの人々は、トルコによる軍事侵攻でニュースとなっているシリア北部に暮らすクルドの人々と同じ民族です。これまでも、ニュースにならない虐待、虐殺に運命を翻弄されてきた人々です。ダラシャ克蘭難民キャンプで出会った人々は、そんなシリア北部の戦乱から逃れてきた人も多く、今もその地に親族や友人がいるという方も少なくありません。「誰も戦争なんか望んでいないと伝えてくれ」と、現地の友人から言われました。「戦争とは、人生で最も醜い行為だよ」と。

なぜ人は戦争を続けるのでしょうか。そこに「悪」がいるからというのは事実なのでしょうか。トルコはシリア北部の「テロリスト勢力」を排除し、安全地帯をつくると宣言しています。対するクルド側の軍隊は、「トルコの名のもとに侵攻してくるテロリストと最後まで徹底抗戦する」と言っています。2020年初頭、アメリカ軍によるイランの要人暗殺のニュースは、世界中に緊張を走らせました。仮初（かりそめ）の平和を維持するために、互いに武力をちらつかせなければいけないこの状況は、本当に人類の目指す共存の姿なのでしょうか。ある日突

然飛んできたミサイルにより、長男を失い、次男は右目に重傷を、長女は右足が千切れ飛ぶという経験をしたお母さんは言います。「私たちはただ、平和に暮らしたいだけなのです」。国民国家や宗教、信条の違いといった境界線は、なぜこうも無辜（むこ）の人々を殺し続けるのでしょうか。僕たち人類は、本当に武器を介してしか問題を解決できないのでしょうか。「戦争のない平和な世の中を」というのは、綺麗ごとには過ぎないのでしょうか。

今回の滞りで、たくさんの方と「音楽の鳴る場所」を共有させて頂きました。「武器ではなく楽器をその手に」。すぐには実現しないことでも、少しずつ、そういった未来に舵を切っていけたら。新月の日から始まったこのプロジェクトも、空を眺めれば十日夜の月。ヨルダンの首都・アンマンの街を包むアザーン（礼拝の呼びかけ）を聴きながら、またこの地に戻ってこられることを願いました。



BABAGANOUJ PROJECT 2019 中東音楽交流事業

—武器ではなく楽器をその手に—

活動報告書

発行 2020 年 1 月 31 日

掲載写真 KEIKO TANABE、KOTARO MANABE、佐藤 慧

主催  Dialogue for People

Dialogue for People (D4P)

フォトジャーナリストの佐藤慧、安田菜津紀が所属するメディア NPO。「声なき声」を届けるため、時間をかけてテーマを追いかけ、写真や文章、様々な表現で「伝える」ことを主軸として活動を展開。どこか遠くの問題に思えてしまう出来事について、誰もが考え、自分の役割を見つける機会をつくりだし、社会課題の解決につながるきっかけを生み出していく。

協力  JIM-NET
الشبكة الطبية اليابانية العراقية

NPO 法人 JIM-NET (日本イラク医療支援ネットワーク)

戦争や紛争によってがんや白血病などにかかったイラクやその周辺国の子どもたちへの医療支援を続けている。2019 年には「JIM-NET ハウス」というイラク初となる小児がん支援総合施設を作り、患者家族支援やがんの子どもたちの教育支援も行なえる施設を運営中。その他シリア難民緊急支援や福島支援も行っている。

協力  KnK JAPAN
国境なき子どもたち

認定 NPO 法人 国境なき子どもたち (KnK)

1997 年に日本で設立された国際協力 NGO。「国境を越えてすべての子どもに教育と友情を」をビジョンに、これまで 15 カ国 (地域) において 9 万人以上の子どもたちに教育機会を提供し、自立を支援してきた。2013 年 3 月より、ヨルダンにおけるシリア難民支援を継続している。

協賛  MS&AD  MS&AD インシュアランスグループ

(前頁) この旅での数少ない 3 ショット。SUGIZO さんが着ている T シャツにはアラビア語で「スギゾー」と書いてある。(©KEIKO TANABE)

(裏表紙) 日の暮れるヨルダン・アンマン市街。夕方の礼拝を告げるアザーンが響き渡る。空に浮かぶ文字はアラビア語で書かれた「ババガヌージュ」。(©KEIKO TANABE)

بابا غنوج

